

## 糖尿病センター

### 1. スタッフ（平成23年4月1日現在）

センター長（兼）（内分泌代謝科教授）

石橋 俊

医員

内分泌代謝科

講師（兼） 長坂昌一郎

野牛 宏晃

大須賀淳一

助教（兼） 草鹿 育代

岡田 健太

安藤 明彦

病院助教（兼） 岡田 修和

高橋 仁麗

齋藤奈緒子

出口亜希子

永島 秀一

シニアレジデント（兼） 5名

腎臓内科

教授（兼） 草野 英二

湯村 和子

特命教授（兼） 武藤 重明

学内教授（兼） 安藤 康宏

竹村 文美

講師（兼） 斉藤 修

秋元 哲

病院助教（兼） 森下 義幸

岩津 好隆

シニアレジデント（兼） 6名

眼科

教授 佐藤 幸裕

教授（兼） 茨木 信博

准教授（兼） 小幡 博人

講師（兼） 牧野 伸二

学内講師（兼） 国松 志保

助教（兼） 堀 秀行

病院助教（兼） 佐藤 彩

青木 由紀

石崎こずえ

シニアレジデント（兼） 3名

### 2. 糖尿病センターの特徴

2009年4月に糖尿病センターが発足するとともに、佐藤幸裕が糖尿病センター教授として赴任した。単純網

膜症から発症する糖尿病黄斑浮腫の治療、前増殖網膜症に対する選択的光凝固による増殖網膜症への進行阻止、増殖網膜症に対する光凝固や硝子体手術による失明防止など、糖尿病網膜症の軽症例から最重症例までを適切に管理できるシステム確立をめざしている。

同4月馬場千恵子看護師長が糖尿病療養指導の専門外来（さかえ外来）を開設した。同4月に栄養部に佐藤敏子室長が加わった。内分泌代謝科、腎臓内科、眼科、看護部、栄養部のスタッフで運営委員会を組織し、糖尿病合同カンファランスを開講している。2010年度は計3回実施した。

### 3. 実績・クリニカルインディケーター

2010年度（1月～12月）の実績は下記の通りである。

内分泌代謝科に入院した糖尿病患者は入院657名中474名だった。1型糖尿病56例、2型糖尿病382例、その他36例で、急性合併症25例、妊娠合併例12例、足病変13例だった。

腎臓内科に入院した499名のうち、入院時診断において糖尿病又は糖尿病性腎症と診断されている症例は64例であった。入院理由は、教育・透析導入・ネフローゼ治療・血糖コントロール・電解質異常や感染症などの合併症など、様々であった。腎生検にて糖尿病性腎症と診断した症例は全腎生検症例116名中7名だったが、腎生検施行理由は糖尿病性腎症以外の腎疾患が考えられたためである。

眼科で実施された糖尿病網膜症に対する硝子体手術は約142件であった。40歳未満の若年者が20%以上を占め、他の施設に比較して若年の重症例が多く、患者教育を含めたケアが必要と思われる。

糖尿病センター合同カンファランス

2月18日 入院患者さんにおけるインスリン治療

4月23日 糖尿病合併妊婦の症例報告

10月25日 血糖が安定しない1型糖尿病のマネージメント

合同カンファランスでは毎回アンケートを実施し、テーマを選定している。可能な限り症例中心とし、多部門からの提言促進するパネルディスカッションや、院外からの招待講演を設け、院内外でのネットワークと診療コンセンサスの形成を目指している。

### 4. 事業計画・来年の目標等

センター全体としては、引き続き定期的に合同カン

ファランスを実施し、診療の連携を密にし、コンセンサスが不十分な診療領域にはマニュアルを作成して対応する。地域に潜在的に存在する患者数を考慮すると、地域との連携も不可欠であり、自治体や医師会と協力して、医療体制構築を行う。

網膜症を適切に管理できるシステムの確立には、定期的な眼底検査が必須であるが、眼科外来の混雑が大きな障害になっている。眼科外来を受診しなくても評価が可能な、無散瞳眼底カメラによる眼底検査システムの導入が予定されている。